

一 紙芝居文化として『演じる』ことについて一

紙芝居は演じてこそ、作品の世界をより深く届けることができます。
紙芝居の特性を生かした演じ方について、考えてみましょう。

■「基本的観点」

(その1) 作品の質を考える。

- =「生きる意味と喜び」が追求され、深められている作品を選ぶ。
- =「演じ手が作品内容に共感できるか」「作品のテーマが集团的共感にふさわしいか」を考える。
- =「紙芝居ならではの特性」が追求されている作品を選ぶ。

(その2) 紙芝居の特性を捉える。

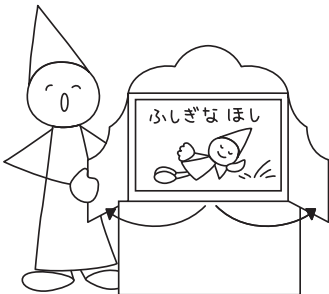
- 特性=「作品世界が出ていき、ひろがる」
- =「作品世界への共感（集中とコミュニケーションによる）」
- という特性を生かして演じる。

■ 基本的観点に立った「演じ方」

◆下読み

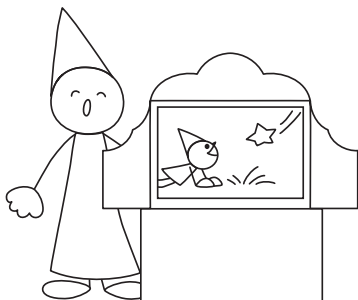
- ①作品を選んだら、そこに描かれているテーマや内面を深く、自分自身のものにするために、演じる前に下読みをする。

◆はじまり



- ①三面開きの舞台を使う。
…集中のはじまり
- ②舞台の横に、観客と向かい合って立つ。
…コミュニケーションの予感
- ③舞台の扉を三面、順に開いて行く。
…作品世界が現実に出ていく予感
- ④作者名とタイトルを読む。
…作家の作品世界が広がる予感

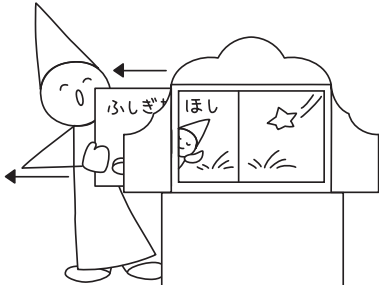
◆内容を演じる



- ①演じ手は舞台の横に立って、観客と向かい合う。
…作品内容を「コミュニケーション」によって深め、豊かなものとする。
- ②演じ手が、自分自身の声で演じる。
…作品世界の臨場感を強める。

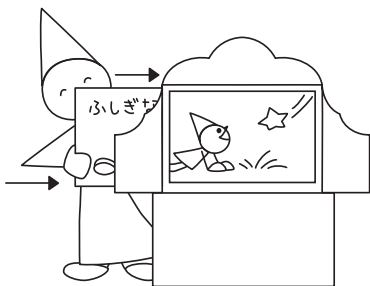
注意点△舞台の横に立って、舞台のうしろに隠れない。
…舞台のうしろに隠れると、演じ手の顔が見えず、声や表情がとどかないので、コミュニケーションができない
△舞台の横に立つ場合、舞台のそばから、はなれない。
…舞台からはなれすぎると、作品への集中が弱まる
△声色は使わない。
…声色を使うと、演じ手だけがめだって、作品世界の深まりをそこなう
△作品世界を離れたパフォーマンスは、しない。
…作品世界をこわし、演じ手だけの自己顕示になってしまう。
△演じている時に、作品の内容を変えて演じることはしない。
…作家の作品世界をこわしてしまう

◆ぬく



- ①三面開きの舞台を使う。
…扉の形によって、画面が現実空間に「出ていくこと」を強める
- ②画面を心をこめて、ぬく。
…「作品世界」が現実空間に広がる。
…今までの画面がぬかれはじめると同時に、次の場面が現れるという連続性が、「強い集中」を作る。
…画面をぬいている時間が、間となって、作品世界の「深まり」をつくる。

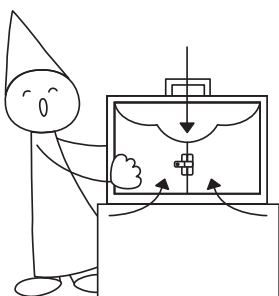
◆さしこむ



- ①三面開きの舞台を使う。
…扉の形によって、さしこまれることが強調され、「次の場面への集中」をつくる
- ②画面を心をこめて、さしこむ。
…画面への集中が「作品世界への集中」となる
…画面をさしこむ時間が、間となって、作品世界の「深まり」をつくる。

注意点△画面をさしこまずに、うしろに置いてしまったり、手に持ったまま読むことはしない。
…集中とコミュニケーションがそこなわれる

◆おしまい



- ①おわり方を大切にし、おわりを表す言葉（例えば「おしまい」）を大切に表現する。
…「おわり」を表す演じ手の言葉は、作品内容への強い集中を終わらせる
- ②三面開きの扉を順に、閉める。
…扉を内に向かって閉める動きによって、現実空間に広がっていた作品世界が、舞台の中にもどる。

注意点△最初の画面にもどさない。
…最初の画面にもどすと、作品内容がおわらずに、はじまりにもどってしまう

☆紙芝居の作品には、二つの型がある

- A. 作品の構成が、作品そのものの中で完結している型＝物語完結型
 - B. 作品の構成が、観客の参加を必要とする型＝観客参加型
- 両方の型を大切に、演じよう。